



第39号
2017・6・11発行
金光教教学研究

歩きながら考える

第二部部长 高橋 昌之



いつも机の前で本を
読んだり論文を書いた
り。教学研究所の人間
といえぼそんなイメー
ジが強いかもしれませ

んが、教学に関する交流集会や様々な会合への出席をはじめ、所外での活動を通じた研究関心の醸成も図ってきています。折に触れて実施する現地調査もその一つです。一昨年には研究生の調査実習もかねて、岡山県井原市にある「樋之尻山嫁いらす観音院」(真言宗)に出かけました。金光からは車で四十分ほどの距離にあります。ここは奈良時代、西国行脚の際に立ち寄った行基が開いたと伝えられます。もとは「樋之尻山観音」と呼ばれていましたが、無病息災で家族(お嫁さん)の手をわずらわせることがないとの霊験があるとことから、「嫁いらす観音」と



して親しまれるようになったとのこと。私たちが一行が訪れた八月のある日、山あいにある広い境内に人影はまばらで、平成十一年建立の巨大な「聖観音菩薩」が迎えてくれました。参拝者は本堂で僧侶から身体に加持を受けたり、持参して加持を受けた下着や既に加持を受けて販売されている下着を身につけたりして、ご利益を頂くそうです。長年にわたって地域の人たちに

よって管理され、昭和五十七年に法人化されています。

私たちは本堂で手を合わせてから、裏山の観音霊場に向かいました。その小高い山には道沿いに多くの小さな石仏が安置してあり、途中には奥の院や「さすり観音」などがあります。さすり観音は山の頂上付近に安置され、頭や手足などをさするとご利益がある観音様でした。これまで一体どれほどの人がさすってきたのでしょうか。観音様は表面がやや風化し、少し丸みを帯びているように見受けられます。ここを訪れる参拝者としては若い部類と思われる私たち(二十〜四十代)でも、山道を頂上まで歩くと皆ジツトリ汗をかいていました。「ここまで登るのは元気なお年寄りだけです」という研究生の感想が印象的です。私たちは日程の都合で参拝できませんでしたが、縁日に当たる春秋の彼岸の中日や毎月十七日の月例祭には中四国を中心に全国から参拝者が訪れ、山をめぐるといえます。そのようにして人を引きつけるものについて考えさせられます。

自分や家族がどのように人生の最期を迎えるのか。このことが教祖の周辺にいた人にとっても大きな関心事だったことは、今日に残された伝えの一端に窺われます。例えば青井サキは教祖から、親を大切にしておかなければ「ぼっくり往生」をしたときに後悔すると告げられまし

た。そして病気の老親に好きな物を食べてもらいながら信心していたところ、父母とも全快したとされます。後に母親が亡くなったとき、彼女はその亡くなり方を見ながら教祖の言葉を思い出してお礼申したと伝えていきます。また教祖の養母いわは体調不良を訴えた翌日に亡くなりました。そこでとせが「只の三日でも患われれば大切にして上げられるのに……」と言ったところ、長患いしなかった事への不足を神に叱られたとの伝えもあります。市村光五郎や金光宅吉も年老いてからの亡くなり方に関わる教祖の「理解」を残しています。

このような伝えを思い出しながら、嫁いらす観音で願をかけた人が教祖広前へも参拝していた姿を皆で想像(妄想?)したりしました。その後私たちは、同市内の神楽伝承館に立ち寄ってから、日長山八幡神社で実際の備中神楽奉納を見学し帰路につきました。これまで知っていた事蹟や資料が少し違って映るようになることは、現地に足を運ぶ意味の一つです。これからも様々な取り組みを通じて、いま教祖で問うべきことを地道に求めて行きたいと願っています。

(岡山・岡山教会)



◇ 平成二九年度の計画 ◇

本年度は、研究生二名、新職員一名を加え、所長以下、総勢一八名にて出発することとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

【紀要論文講読セミナー】

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識し

た取りくみです。三年目となる今年は、紀要三〇号までの中から五本の論文を取りあげています。なお、参加希望の場合は事前にご連絡ください。

場所・金光北ウイング(光風館研修室)
時間・各日 一三・〇〇〜一四・三〇

〈実施済み〉

第一回 五月一日(水) 担当・大林浩治

荒木美智雄「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』」

―その宗教学的意味について―(第二三号)

〈予定〉

第二回 七月一日(月) 担当・北村貴子

森川真知子「後家としての神

―一子大神の生と死―(第二〇号)

第三回 八月一日(木) 担当・岩崎繁之

早川公明「覚書」「覚帳」の執筆当初における視点の相違について」(第一六号)

第四回 九月一日(土) 担当・白石淳平

瀬戸美喜雄「神の怒りと負け手

―明治六年十月十日の神伝をめぐって―(第一七号)

第五回 十一月五日(水) 担当・高橋昌之

福嶋義次「死を前にした金光大神

―「身代わり」考―(第二八号)

【第五六回教学研究会】(予定)

六月一六日(金)～一七日(土)に第五六回教学研究会を開催します。今年、「資料と信仰観、その関係性への眼差し」をテーマに、第一日に研究発表、第二日には、高木博志氏(京都大学人文科学研究所長)による講演、続いて全体会(コメント・討議)を予定しています。

【第一一回教学研究に関する交流会】(予定)

九月一六日(土)、金光北ウイングにて、「教えを生活に生かすには」をテーマに、第一一回教学研究に関する交流会を開催します。霊地在住の方はもちろん、どなたでもご参加頂けます。なお、参加希望の場合は事前にご連絡ください。

【第一八回教学講演会】(予定)

布教功労者報徳祭時(二月一〇日)に、紀要五七号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

○

この他にも、他宗教団の教学研究者との交流(教団付置研究所懇話会第一六回年次大会、於曹洞宗総合研究所)や、学会・研究会を通じた一般諸学問の研究者との交流を通じて、広く現代の問題関心との関連を深めながら、研究内容の充実を図ってまいります。

また、継続して研究に連動した資料の収集・

管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

これらを通じて、より一層、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えております。

【平成二九年度研究題目】

〈第一部 教祖研究〉

・金光大神直筆資料に見る藩との交渉

所員 大林浩治

・金光宅吉筆写帳面「別の帳」部分についての基礎的研究

所員 岩崎繁之

・「無礼」の問題とそれが「覚書」にもたらす信仰史の問いかけの意味

―他の直筆帳面類の体験の様相も視野に入れて―

所員 白石淳平

〈第二部 教義研究〉

・語られた「老い」の諸相

―いま求められる議論に向けて―

所員 高橋昌之

〈第三部 教団史研究〉

・戦後占領期の布教活動を通じた「教団」構想

―地方賦課金制度導入の経緯に注目して―

所員 児山真生

・明治末大正期の地域社会における教会所設置の諸相

所員 山田光徳



客殿障子張替作業(4月)

★提

研究員

八坂恒徳

★言

「何の信心をしていますか」



こうした問いを投げかけられた時、瞬時にどのような答えを思い浮かべられるだろうか。当たり前のこと、分かり切っていることだと一笑に付されるかもしれない。しかしこの何年か、後輩の若手教師に向けてこの質問を試してみた時、例えば「お札の信心」、あるいは「あいやかけよの信心」、「人を助けてわが身が助かる信心」等々、教条と化した答えは様々返ってくるのであるが、多くがその前提となる部分を「問い」としていないようにも感じるのである。かく言う私も、かつてはその一人である。そんなことを考えるのも、次のような話からである。

昭和十八年に学院在学中であった私の祖父は、肺を病んで除隊を余儀なくされたこともあり、洒掃一つとつても元氣な同期生と同じようにはいかず、気を配り、多少の無理をしながらの学院生活を送って

いた。

ある時、高橋正雄先生のもとに呼ばれることがあり、体の具合はどうかと尋ねられた。

「寝たり起きたりで、ボツボツですが、皆さんのように修行もできませんので、お願いしたい無理をしています」と申し上げると、「あんた何の信心をしていますか」とのお言葉。

「……、今更言わずとも分かったことであるから黙っていると、「教祖さまのどこかに無理がありますか？」と二の矢が飛んでくる。

頭の中でぐるりと教祖伝をひも解くと、無い。教祖さまの信心に無理なところは一つもないことから、口を衝いて出たのは「ごいません」。

その後、わずかな時間ながらも高橋先生から、病氣という自分のいのちの一番身近な難儀を通して無理のいかない、調子のええ生き方が分かる、身に付けさせてもらうことが修行であるとの教えを受け、祖父の信心観、殊に修行観が木っ端微塵に吹き飛ばされたとのことであった。

表題の問いに対する祖父の回答は、「金光教の信心」、あるいはその道開きである「教祖さまに倣う信心」というところだろうか。それは修行で求めるものと同義であり、また祖父に限らず当時多くの求信者共通の認識であったようだ。そしてそれはどこまでも知り難きものに飛び込んでいく営みでもある。

これまで教学の営みとして、多くの先人が自らの

信仰をかけた弛まぬ自己吟味の果てに、今日の「教祖」を知る手がかりとなる基礎研究や典籍編纂が成されてきた。またそれが、今も脈々と受け継がれていることへの恭敬の念を払うとともに、その信心の自己吟味の力こそ教学の財産と感ぜずにはいられない。

冒頭、後輩教師の回答から「金光教の信心」「教祖さまの信心」と出なかつたのは、それらが既に「問い」ではなく、「環境」となっているためではないだろうか。一方で、信心生活の実践、救済・布教の方途、教会に伝わる教風・教説への理解等に重きや熱意はあるようだ。金光大神にとって自らが置かれる「環境」は、決して盤石なものではなく、むしろひどく不安定なものであったと言えよう。その「環境」への「問い」こそ、神との関わりの中で道がつく基となつていったと思うのである。

改めて現代、信仰に生きることを求める時、既存の教徒・信徒家庭に生まれ育つたか否かに拘わらず、信教の自由の中で自らが選び取った「金光教とは」「教祖さまの信心とは」が絶えず吟味され、全国各地に受け継がれる伝統的な教風や教説、その中にこめられる「教祖さまの信心」を明らかにしていく作用が全教の中で大きく展開していき、真実の「金光教」が磨かれていく、その先鋒としての教学研究所の働きを念願させて頂く次第である。

(大分・大分教会)

平成二八年度 研究報告座談会

新資料と出会って、いま、そしてこれから

日時——平成二九年三月二七日

出席者——大林浩治、児山真生(司会)、高橋昌之、岩崎繁之、白石淳平、森川育子(記録)



司会

昨年(平成二八年)の教報三月号に、教団へ新たに提供された金光大神在世時の書類や管長家関係の資料(約三三〇点)について、本所が研究を通じて明らかにして行くことが紹介されました。新資料は、昨年の紀要五六号に掲載された三論文で、

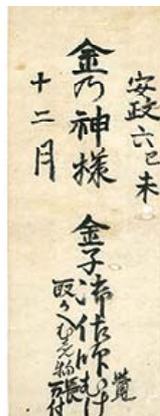
研究活用されました。

今日は、今年度の研究報告の取り組みを手がかりに、ここまで明らかにくなってきた新資料の内容を交えながら、今後の課題に向けて話を進めて行きたいと思えます。

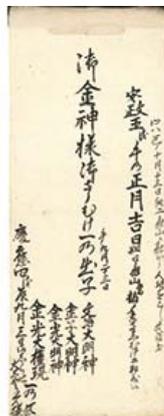
高橋

研究報告の中には、新しい事実がいくつか示されていました。

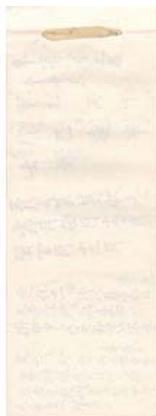
この内容はまた後で話になると思いますが、その前に、金光大神在世時に関わる帳面が五帖あるということで、それぞれの概要を聞かせて下さい。



「帳面1」



「帳面2」



「帳面3」



「帳面4」



「帳面5」

《編者注》

現在、金光大神在世時に関わる五帖の帳面の呼称が確定していないため、この記事では、区別するために「帳面1」、……「帳面5」と表記した。

岩崎

昨年、五帖の解読作業を行い、一通りの作業を終えました。ただ、書かれている文字は読めても、書かれている意味が分からない箇所がままあります。これからは、研究に取り組みながら、それらの意味を求めて行くこととなります。これまでの作業を踏まえて、各帳面の様子を大づかみに言えば、「帳面1」「帳面2」

は主に安政期から明治期まで

の金銭に関する内容、「帳面3」は金光大神の年譜のような内容です。

「帳面4」は、様々な事柄や内容のものが一まとめになっています。

そして、「帳面5」は、金光宅吉が筆写して綴ったもので、内容は「お知らせ事覚帳」を筆写したものと、そして「別の帳」と呼んでいます

が、「覚帳」「覚書」ではない金光大神の帳面を筆写したものです。もっとも、「帳面4」については、まとまりをもった帳面と見ることができ

るかどうか、検討の余地があります。

大林

「覚書」や「覚帳」を知っている私たちとしては、新資料が帳面という形態で提供されたことの影響は大きいですね。ただ、解読作業を経て、「帳面1」から「帳面4」については、書かれていることが「覚書」や「覚帳」の内容とずいぶん性質の違うものであることが分かっています。

岩崎

私たちが知っている帳面は、「覚書」や「覚帳」、それから「願主歳書覚帳」、「広前歳書帳（教祖御祈念帳）」ですね。これらの帳面には一つひとつ、固有の意図や目的がうかがえるものでした。ところが、「帳面1」から「帳面4」について、そういう一つの認識を持ちにくいもののように感じています。

そして「帳面5」については、私は紀要五六号で「覚帳」の筆写部分を取り上げました。引き続き「別の帳」の部分に取り組んでいます。「別の帳」については、近年中にまず全体を公開してから、具体的研究に活用していくことになると思います。

白石

金光大神に関わる帳面には、それぞれ意図や目的があると思ってきました私たちの認識も、改めて考えてみる必要があるかもしれませんね。

大林

帳面に綴られた内容の多様さとともに、「帳面1」や「帳面2」の場合、金銭出納に関わって、



同じ計算を何度もし直していることが、あちこちに見受けられます。このような記述からは、金光大神が何のために、あるいは何を直しているのかという疑問がわいてきます。

岩崎

これまで、事実と言えば、主に「覚書」や「覚帳」に書かれていることがベースになってきました。「帳面1」「帳面2」に記された

金銭の様子は、「覚書」「覚帳」からはうかがい知れなかった、明治期以前の広前の実態の様相や金光大神の営みに関する新事実と言えるものですね。

高橋

金銭をめぐる金光大神とその広前を行き交う人びとの様子が捉えられると、参拝者の存在が前景化されてきた広前というものに、



奥行きや広がりが生まれてきますね。もともと、具体的な究明はこれからということですが、こうした究明の先では、浅吉さんをめぐる金光大神の態度や対応の捉え直しも視野に入ってくるかもしれませんね。

白石

新資料の位置づけに関わる問題としてですが、果たして、「覚書」や「覚帳」の傍証資料ということが良いのかどうか。これからの課題の一つになってくると思います。それとともに、これまで教祖研究のベースになってきた「覚書」「覚帳」に対する認識の見直しということも起きてくるかもしれません。それくらいレベルの違う資料が出て来た感じがしています。

司会

話を聞いてみると、ふと、今から約四〇年前に新しい資料として「覚帳」が提供されて以降の研究とは違う、新たな研究の動きがこれから始まるような感じがするのですが。

岩崎

資料を見てきた者の感想としては、新たな研究という程のことにはならないと思います。むしろ、ここまでの積み重ねがあつての現在という思いを強くしています。ただ、これまでの延長線上というだけでは、色々と不具合が生じてくるのではないかなとは思っています。

大林

それはこれからの研究を通して明らかになることでもあります。

が、ただ、ここまで資料を見てきた範囲で言えば、新資料の中に書かれている「お知らせ」には、色々な層があることが分かってきました。例えば、個人の意識と一体化するような「お知らせ」が書かれている一方で、神からの「お知らせ」によって行動したことのみを書いているものがあります。そして、行動した時の「お知らせ」の内容は書かれていない。書かれていない「お知らせ」の内容は、「覚書」や「覚帳」を対照することでいくらか分かるかもしれませんが、それとともに、内容が分かれば良いということではなく、書かれなかった意味を考えてみなければなりません。

司会 事実関係の関心から聞くのですが、行動した時の「お知らせ」の内容が書かれていないというのは、その時点で「お知らせ」と認識していなかったということではないのですか。つまり、「お知らせ」の認識に関わるタイムラグというか、「覚書」や「覚帳」など、後から振り返って書く時に、「あれは『お知らせ』だった」と認識し直したということは考えられないのですか。



岩崎

「お知らせ」だということは、その時点で認識していたと思います。ただ、同じ事柄でも帳面によって、「お知らせ」と書いているものと、出来事のように書いているという違いがあります。

司会 その違いが生じる要因は、タイムラグではなく、書く時の金光大神の意識の違いということですか。

大林

要因がどうかというより、私としては金光大神が一つの出来事を色々な捉え方をしていること自体が興味深いポイントだと考えています。例えば、「覚帳」では「神の頼みはじめ」とされている安政四年一〇月一三日の繁右衛門の「屋敷

宅がえ」の出来事を、「帳面2」では「金神様おかげのはじめ」と書き、「帳面4」では「信心はじめ」と書いている。これらの「神の頼みはじめ」、「金神様おかげのはじめ」、「信心はじめ」、という色々な表現の違いには、その時々々の金光大神の意識の流れというか、出来事に対する意味付与のあり方の変化が表れているのではないかと考えています。

高橋

安政四年一〇月一三日の事蹟と「神の頼みはじめ」の関係は、よく知られていますし、また、そのことを前提にして事蹟を読んできたとも言えます。いま三つの「はじめ」の話を聞いていると、これまでの認識自体も相対的に見直されていくことになりそうですね。

大林

この三つの「はじめ」との関わりで、私が注目しているのは「さしむけ」という言葉です。安政四年の出来事に遡って見直されようとしていたのは、「さしむけ」とされた自らの生ではなかったかという印象を持っています。金光大神は「さしむけ」という神のプロジェクトに参入しつつ、その実、「さしむけ」ということが謎だったのではないかとも思えます。「さしむけを生きる生」として自身が見返されるのであり、自身からの主体的見返しではない。その意味で、このことは、今日の私たちの主体意識を前提にした信仰確認のあり方が問われることになるのではないかと思っています。

○

司会

三つの「はじめ」が、同一の出来事であり、同一の「お知らせ」に関わっていることから、「お知らせ」とは何か、という問いも改めて浮かんできますね。

白石

色々な帳面や資料が出てきてそれとともに、知らなかった生活的な、あるいは人間的なものが沢山出てきてその中で何が「お知らせ」となっているかを考えることで、実は「お知らせ」を「お知らせ」と



して出会わされた人間の感覚や経験がうかがえることもあるのではないのでしょうか。

岩崎

新資料の中には、「覚帳」に書かれていない「お知らせ」がちよこちよこあります。これらも新事実ということになります。その驚きの要因に関わって、私自身の中に、「覚帳」には「お知らせ」が網羅的に書かれているかの思い込みがあったことに気付かされます。例えば、「帳面5」に含まれている、明治一六年まで書き続けられている「別の帳」の起筆に関わって、明治四年一二月の「お知らせ」があります。金光大神にとつては、結構、大きな「お知らせ」の一つだったと思うのですが、このことは、「覚帳」にも、「覚書」にも書かれていません。このようなものを見ると、改めて、「覚帳」に書かれている「お知らせ」は、取捨選択されたもののようにも思えてきます。

大林

それは、「覚帳」がどうという帳面かという問いでもありますよね。

岩崎

分かっていたことが、本当に分かってたのかという感覚ですね。

司会

今日の話の中で、これまで知らなかった事実というものを、いくつか紹介してもらいました。これから研究を進めていくことで、もつと驚くような事実も出てくるのではないかと思います。こうした点を明らかにしていくことで、教内の通説や通念の見直しということもこの先起きてくるかもしれないですね。そうとしても、研究上において明らかだと思ってきたことを、今一度、見直してみたいという気運が生まれて来ている。それは資料と出会った、いまにとつて大切なポイントではないでしょうか。

まだまだ、「別の帳」のことなど、話し合ってみたいこともあります。今後の取り組みを待ちながら、いずれの機会にと思います。今日はありがとうございました。



ニユーフェイス

研究生

藤井浩志(岡山・児島赤崎教会)

私は「人間が人間らしく、より良く生きる生き方とは何なのか？」という疑問を幼少の頃からずっと抱いています。

金光教のことも宗教のことも興味のなかった私が、生きることの難しさと自分の力の限界を感じ、自分が存在する意味を見出せずに苦しんでいた時、末期癌で入院していた母方の祖母から夢でみたお知らせを伝えられたのをきっかけに学院に入学しました。今までの人生も、現在研究所で御用させて頂いていただいているのも、全て様々な人からの祈りに支えられていることだなと感じます。

研究生としての生活が約一週間経ち、紀要論文、教外図書の講読や指導所員との懇談、講座を通して学院生の頃とはまた違った角度からものを見ることの大切さを実感しています。この命をどう使い、どう生きれば良いのか？求める心を持ち続け、お役に立てるよう楽しんでこれからの研究生生活に取り組みでいききたいと思えます。

研究生

堀江道広(香川・花之宮教会)

学院を卒業し、研究生としての生活が始まった今、自分が本当に納得できることを増やしていきたい、表現できるようになりたいとの思いがある。

：：人物誌点描：：

原田(旧姓—山本)伊平について

原田伊平は山本定次郎の実弟であり、『金光教典人物誌』(一九九四年刊行)には改姓前の「山本伊平」の名で掲載されています。同書で詳細不明となっていました。刊行後に新たに情報が寄せられていますので、ここに紹介します。

○

原田伊平は元治元年正月一九日、備中国小田郡上稲木村(現岡山県井原市上稲木町)で出生。山本徳次郎、志摩の四男。志摩は伊平の産後「血の道」となり足が立たなくなったため、徳次郎が金光大神の広前に参拝して信心を始め、全快した。その後徳次郎の信心は一時中断したが、志摩が再び大病を患ったため、伊平の兄定次郎が明治八年に入田村の瀬戸廉蔵のもとへ参拝して信心を進めるようになり、全快した。なお定次郎は明治九年から金光大神の広前にも参拝し、多くの理解を伝えている。

伊平は明治一六年九月四日に岡山県小田郡笠岡村(現岡山県笠岡市)の原田初の養嗣子となり、原田に改姓して、実質分家した。これは、

伊平が徴兵検査を受ける年齢(二〇歳)になったものの、長男は兵役が免除されると知り、原田初の養嗣子という名目で姓を貰ったためである。後に山本家の隣地に住居を構えて暮らしたという。

その後、明確な時期は不明だが、岡山県後月郡吉井村(現岡山県井原市芳井町)の早川瀧十郎の次女由喜を妻に迎え、農業を営みつつ、二女をもうけた。なお、由喜は定次郎の妻富野の実妹であり、兄弟、姉妹同士の結婚である。

伊平は定次郎が後に入田教会長となったことから、入田教会へ参っていたと思われる。大正一〇年四月二八日、現井原市高屋町高草の岡本房吉の次男房一を養嗣子に迎え、長女喜美との婿とした。大正一三年一月二日死去。六一歳。なお、房一、喜美と夫妻が入田教会在籍教徒として信心を受け継いだという。

○

今後とも教祖や直信をはじめとした情報をお持ちの方は、お寄せ下さい。



ります。というのも昨年、人を助けるお役に立たせて頂きたいとの思いから学院に入学し、今までの自分では考えたことが無かったことを、様々な方の考え方に触れることにより考えることができました。その中で、自分が本当に納得していることを話さなければ自分の想いは伝わらないのだと実感しました。それは、自分の想いを正確に文字や声にするこの難しさを知ることでもありました。

これから、様々なことに関心や疑問を持ち新しい自分に出会い、表現できるよう研究生生活を楽しんで充実した日々を送りたいと思います。

書記

小玉さつき(富山・高岡教会)

私は五月から教学研究の事務室と資料室で御用をさせていただいております。研究所に関してや金光教の歴史などほとんど知識がありません。また、事務仕事など今まで経験がなかったので、すべてが初めてです。正直なところ、不安な気持ちが大半を占めている状態で御用に入らせていただきました。御用を始めてまだ一週間程の現在ですが、研究所の先生方は皆さん優しく面白い方ばかりなので、お話をさせていただくうちに不安な気持ちはなくなり、ワクワクといった楽しみな気持ちになりました。これから覚えることもたくさんあると思いますが、先生方の研究している姿や御用姿勢を見ながら、皆さんを少しでも支えられる御用ができるように、私らしく頑張りたいと思います。

研究所の思い出

《1》

研究所の思い出

元所員 宮本和寿



退所（平成十九年六月末）して十年になります。現在は教会御用の傍ら、縁で塾講師にも就いてい

ます。当初、数学希望でしたが、中高生の国語（小論文を含む）という、私の研究所在職時の文章をご存じの方から許され難いような担当を頂いています。今も時折、研究所で表現に苦心した記憶が呼び覚まされ、この機会に当時の錯綜ぶりを綴ってみます。

そもそも私には、自ら紡ぎ出す言葉に、意味内容を過剰に期待する一方、強い空虚・挫折感を抱く傾向がありました。ゆえに、書くほどに書き始めの期待感は、自ら裏切られるのが常でした。むしろ「書けない」「書かない」で済ませられたら良いのですが、満たされなさを補おうと饒舌なほど書き連ね、かえって悪循環に陥っていたようです。

そんな時、形の上で目立った特徴があります。

まずは一文の長さです。研究発表など、一行内でまとまる文は稀でした。百字を超える一文も記憶しています。しかも、「主語がわからない」「重文・複文が多い」「論理が破綻する」などの癖もありました。検討する先生方には、苛立ちを超えて呆れられたに違いありません。ある研究報告の時のこと。提出間際に読み直してみると、殆どの言葉に手応えを感じ取れず、とっさに多くの言葉を「」（カッコ）付けにしたのです。それは全単語の三割以上でしょう。これほど多く意味保留しては、検討になりません。また、書いた文や用語の意味を補おうと、無駄に付した注釈の数も際立っていました。研究報告での注釈は、百以上の常連でした。その反面、研究の意義や立場を明確にする工夫は出来ません。特に先行研究との関連を意識できず、それこそ注釈を付さず（参照せず）、むしろ自分の研究と関係のない文献ばかり参照していました。おかげで「ぐるぐる思考」「崩壊力」とか、ほかの誰にもない渾名を頂きました。

そんな表現の錯綜かつ迷走してきた背景に、入所以前の生き方が思い当たります。人が成長するのに秩序ある段階があるとは思いませんが、人生に長い停滞や混乱を招かないため、人によっては向き合い難くとも逃げられない課題があると考えています。私は、それに取り組み思慮や

勇氣に欠け、焦りやこだわりを各所で生んでいったのかも知れません。

研究所入所前の面接で、所長・佐藤光俊先生から、「君の入所の動機はさておき、これからは研究者としての課題を見い出さなければならぬ」といった示唆を頂きました。事実、「しまった、苦しみから解放されようと願い、入所の動機にもした問題は、入所前に目途がつけられるべき課題だった……」と、衝撃を受けました。

こんな私がなぜ入所し、七年二ヶ月間もの在職を許されていたのか。現在、そのご縁が無駄にならないよう、遅まきながら退所後、研究所で学んだことを糧に、入所前に果たすべきだった課題とも向き合う気持ちで暮らしています。

（山口・小野田市教会）



第43回教学研究会にて

研究所の思い出 《2》

事務室の御用とは……

元事務長 馬場正教



私は、平成三年五月二〇日から平成二年七月末日まで、一九年と二ヶ月余りの年月を研究所の事務室でご用にお使い頂きました。その中に数多くの思い出がありますが、深く心に残っておりますことを書いてみます。

事務室で最初に受け持った御用は、会計処理と給与計算でした。当時コンピュータはありましたが、会計処理は手書きで、内訳簿のみが入力と印刷でした。給与計算については、先人が残して下さった給与計算ソフトをバージョンアップすることでした。ベーシック言語は知っておりますましたが、PIPS言語は初めてでした。プログラムの解らない部分はメーカーの助言を頂き、無事完成させました。

記憶を呼び覚ましてみますと、当時、会計検査員から、各センター、霊地各機関の内訳簿と

金銭出納簿、伝票の様式がまちまちなので、統一化してほしいとの要請があったことが思い起こされます。その要請を受け、PIPSソフトのFORM機能を使用した伝票の印字方法を開発しました。それによる伝票の試作品を財務部へ持参すると、了承して下さい、正式に本部経費で運用されることになったのです。その後、財務部の紹介で、この伝票を利用される教務センターも出てきたと聞きましたが、大変ありがたいことと思っています。

続いて、御慰労計算ソフトの未完成部分を手直しし、実用化しました。さらに、学院事務長の角春道先生に計算式の作り方を教えて頂き、それを応用して、研究所の会計処理を自動化したエクセルの会計ソフトを完成させました。しかし、これらの計算式では、予算の執行状況が把握できないために、年度末に大変な思いをしました。そこで、別体系の検算プログラムを作成し、月々の各項目の執行状況が、一覽で判るようなプログラムを作りました。研究所の予算額が年々減らされ、経費執行に関わりいろいろ計画見直しが求められる中、大変役に立った事を覚えております。

話は前後しますが、平成一三年一二月には事務長にお取り立て頂き、運営に携わることとなりました。平成一四年、「教学研究所設立五〇周年記念事業」で、事務室も御用に加わる事とな

り、「事業年表」と「職員名簿」作成の実務を担当することが決定されました。事務室三人で、堤光昭先生が事務長時代に入力して下さいていた研究所の記録から、開所以来、保管してある事務室関係書類のすべての確認作業を始めました。さらに所長より、事務長である私には、開所当初からの運営記録類を製本した資料が相当数手渡されました。事務室の通常御用の他に、それを読まないといけないので、当然毎日のように残業する事となりました。この年は花粉症が重症化し、耳鼻科で頂いた薬を服薬すると眠くなったり、思考回路停止などの副作用が出ましたが、薬を止めると鼻水が出続けるので大変でした。

平成一〇年には結婚のおかげを頂き、平成一二年三月に長女が誕生し、平成一四年一月には長男が誕生するなど、仕事でも家庭でも色々なことが重なり、さらに大変でした。

平成一五年一二月開催の教学に関する懇談会の資料として提出する際は、締め切りの三日前から、事務室三人共に宿舎に帰れず、二晩の徹夜をして、提出日の朝五時頃に完成した時には、事務室員皆で、喜んだのを昨日のことのように覚えております。

当時は厳しく感じましたが、教会で御用する中で、研究所での経験が役に立っております。

(愛知・津島市教会)

彙報

(平成二八年六月一日
〜二九年五月三一日)

▲ 人事関係 ▼

一、職員(教団職員)

○臨時御用奉仕田村清子、一〇月二四日付で布教部(金光新聞編集室)に異動。

○部長高橋昌之、一〇月三二日で任期満了、翌一月一日付で再任(第二部長に指名)

○教徒小玉さつき、五月九日付で教団職員に任命され、書記に就任。

二、研究生

平成二九年度

○教徒藤井浩志、同堀江道広、五月九日付で研究生を委嘱。

三、研究員

○研究員高阪有人、同八坂恒徳、一月一九日で委嘱期間満了、翌二月二〇日付で再度委嘱。

※五月三一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員二名、助手四名、事務長一名、主事三名、書記一名、研究生二名(計一八名)、嘱託七名、研究員

八名、評議員五名。

☆ おめでた ☆

結婚

○助手藤井千枝(旧姓浅田)は、六月七日、真樹さん(岡山・連島)と結婚。



出産

○所員山田光徳・光世夫妻に、九月二七日、長男大輝くん誕生。



研究生入所式後、客殿前庭にて(前列左から小玉、堀江、所長、藤井浩)

SAKAMICHI

今号も無事発行することができました。執筆のお願いを快くご承引頂き、寄稿して下さいました皆様に御礼を申し上げます。

さて、昨年八月、本所ホームページをリニューアルしました。内容に大きな変更はありませんが、視覚障害者向けに、バリアフリーを目指しました。

例えば、ホームペーजीリーダーなど、ウェブページを音声で読み上げる音声ブラウザソフトウェアは、各ページを上段左端から読み上げていきます。そこで、目次に当たるナビゲーションメニューは、本文より先に読み上げられるように配置を工夫しました。また、音声ブラウザが読むことのできない画像の使用を控えるとともに、誰にでも見やすく分かりやすいレイアウトを心がけました。

今後とも、ホームページを本所の情報発信の場の一つとして、人に優しく使いやすいページ作りを心がけ、更新していききたいと思います。ご意見をお待ちいたしております。

た

発行・印刷 金光教学研究 研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話(〇八六五) 四二一三一七

FAX(〇八六五) 四二一三一九